

黄熟香^{おうじゅくこう} これを蘭奢待^{らんじやたい}と呼ぶ。

全長約一五八センチメートル

末端の分岐した部分が約一一センチメートル

切り刻んだ内側の空洞部分が約九三センチメートル

総重量は約一一・三キログラム

一説には、蘭奢待の全長は約一五八センチメートルで、本体部分が約一二一センチメートル、末端部分が約四九センチメートル。本体の大部分が空洞である。

古い書物によると、はじめ黄熟香と呼んだが、聖武上皇が改めてこれを蘭奢待と名付けたとのことである。

幣帛が付属する。

大紅沈^{だいこうじん}

全長約一〇五センチメートル

切り取られて短くなった部分が約七三センチメートル

細い方の切り口が直径約二七センチメートル

太い部分の直径が約三二センチメートル

小さな切れ端が三つあり、そのうちの一つは樹脂が沈着していない。

総重量は、切れ端を合わせて約一七キログラム

古い書物によると、紅沈の下に鉢が置いてある。紅沈に含まれる油分が滴り落ちて鉢の中に溜まっているとのことである。

東大寺の記録に次のようにある。寛正六年（一四六五）九月二四日に三倉^{みつぐら}（現在の正倉院）が開けられ、蘭奢待が切り取られた。これは足利義政によるものである。天正二年（一五七四）三月二八日にも再び開けられた。これは織田信長によるものである。この時の開封のための勅使（天皇の使者）は日野資定・飛鳥井雅教の二名の公卿である。旧式にのっとり、約五センチメートルを切り取った。これを三片に切り分け、一片は自身のものとし、残り二片は諸大名や近習・外様の家臣などに分け与えた。